

5. 対話型鑑賞法

近年、アメリカ・アレナスが行ってきたギャラリー・トークが、対話による美術鑑賞の優れた成功例として注目されている。アレナスは、元ニューヨーク近代美術館教育部の講師で、1998年日本人のために書き下ろした『なぜ、これがアートなの?』と同名のビデオの出版が大きな反響を呼び、^{*28}99年に主演したテレビ番組「E T Vスペシャル<最後の晩餐>」が日本賞グランプリを受賞。現在は、世界各国の美術館から美術教育の講師やゲスト・キュレーターとして招かれるなど活躍している。

日本でもアレナスの方法に着目した美術館や学校、市民団体などが招聘して、ギャラリー・トークを交えたワークショップが各地で開催されており、2005年には松江市の県立美術館にて行われたところである。

この鑑賞法の基本的立場は、鑑賞は創造的な活動であるとする。これは、学習指導要領図画工作科の目標「表現及び鑑賞の活動を通して、つくりだす喜びを味わう（後略）」及び中学校美術科の目標「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい（後略）」に照らして、同様な立場である。鑑賞は、「つくりだすもの」であり、「創造活動」だとしている。現在の指導要領は、鑑賞や表現についての知識等を教えるというよりも、資質や能力をいかに育てるかを重視している。^{*29}

アレナスのトークに代表される対話型鑑賞法（以下、アレナス流）の特色をあげると、第一にトークの形式がある。一般に美術館でのギャラリー・トークや授業を思い浮かべると、学芸員や教師などが作品について語り、児童生徒はじっと聞くという形をとられることが多い。アレナス流では、美術作品の解説をするのではなく、質問を投げかけて思考と対話を促す進行役の役割を果たす。

第二に、内容の特色がある。アレナス流では、作品の意味や解釈をある定まったものとして押しつけることはしない。^{*30} 作品を見て関心をもったことや話題としたことを中心に話し合いで掘り下げていく。そのため、その時々限りの解釈や味わいを生み出していくことになる。各自が感じたことや考えたことを語り合い受けとめ合いながら作品の意味や価値、おもしろさを発見していく。

第三には、鑑賞の目的がある。一般的には「創造活動の喜び・美術を愛好する心情・感性・美術の基礎的能力・豊かな情操」（学習指導要領中学校美術科の目標より）を養うことなどになるが、アレナス流では、さらに、作品の解釈を通して見る力を育てるとか、考える力、判断する力、考えを言語化して表現する力などの知的側面を重視している。これ

*28 アメリカ・アレナス（福のり子 訳）、『なぜ、これがアートなの?』、淡交社、1998

*29 奥村高明、「鑑賞における『子どもの発見』」、アレナスほか『MITE!ティーチャーズキット2』、淡交社、2005、p.73

*30 アメリカは、作者の手元を離れたときから、作品は美しさや技術、オリジナリティ、作者の意図とは関係なく、結果的にどれほど鑑賞者の意図を引き出せるかが重要だという。前掲書、『なぜ、これが…』、p.41

らの特色をもつアレナス流は、20 世紀後半の認知科学研究などの成果を背景としている。^{*31}

鑑賞の学習における言葉の表現については、疑問を投げかける声もある。鑑賞の感想を言葉で発表させたり、記述させたりする場合には、言葉の表現力が鑑賞の能力の指導や評価に影響してしまい、評価や指導に支障をきたしはしないかというのである。確かに、授業での様子を適切に評価することを怠り、授業後の感想文などに頼りすぎると適正を欠く恐れもあろう。一方で、友だちの作品の「工夫が素晴らしい」とか、「頑張っている」などの誉め言葉で評価しながらも、それを支える造形的な根拠が語られていないものを見聞することも少なくない。造形的な要素を意識させるためには、言葉で考えさせ、整理することも鑑賞の能力を高めるためには重要である。児童生徒の発達に応じて、造形に関する言葉の指導を積み重ねていくことが必要である。^{*32}

また、中学校学習指導要領の指導の配慮事項においては、「作品を批評し合い、互いのよさを認め尊重し合う」ことが示されている。^{*33} 一人一人が作品をめぐる話し合いに積極的に参加し、個々の思いを交流し合って互いに認め合うとともに、新しい意味や価値の創出を担う体験をするアレナス流は、望ましい市民社会の構成員を育成するということにもつながっていく。

この方法が魅力的なのは、単に新しい鑑賞法であるというだけでなく、今日求められている授業のあり方にも一致するものだからである。

(1) アレナス流の授業の進め方

●事前準備として、授業者は扱う作品について細部までしっかり見ておく。

これにより、授業者は鑑賞者に背を向けることなく、鑑賞者の様子に目と心を配ることができる。し、表現の巧みさに欠ける発言であっても、発言者の意図を的確に捉えることができる。

①静かに作品を見つめる。

自分で作品をよく見て、その第一印象について考えさせるには、ここで十分に時間をとる。

②最初の発問をする。

「この作品について話してください。これは何でしょう?」「いったい何が起きているのでしょうか?」など、シンプルな一言。決まった言い方はないが、鑑賞者は自分の考えや感じたことを発言し対話が始まる。この授業を2～3回経験した後ならば、「これはどう?」でも良いかもしれない。

③いくつかの意見が出たら、それらをいったんまとめる。

*31 上野行一、『『まなざしの共有』アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』、前掲 Web サイト

/Kanshosite/AmeriaUeno.html

*32 村上尚徳、「美術、工芸における指導の改善(九)」、『中等教育資料』、2006年2月号、p.64-65。事例9は、5年生なりの造形的な言葉を交えた感想文になっている。

*33 中解説、p.113

発言者の意図を尊重し、発言された言葉を取り入れてまとめる。

④第二の発問をする。

「何を見てそう思ったの？」意見を深めたり、説明が必要だったり、それまでの流れとは異なる意見が出たときに、この発問をする。これも別の言い方でもかまわない。

これにより、第一印象について考えさせ、改めて作品の細部に注目して見直したり、自分の考えを振り返ったりして、自分の解釈の手がかりを絵の中に探すことを促す。

⑤ときには、考えをさらに詳しく述べたり、説明するように促すことがあってよい。

「どうして、そう思ったの?」「それは、どういう意味?」「誰か付け加えたいことがある?」誰かの意見を他の子に説明してもらうこともある。

⑥いろいろな意見が出たら、要約する。

鑑賞者の言葉を生かして、話し合いの流れを整理して示す。慣れてきたら、希望者にまとめさせたり、指名することもできるようになる。

⑦子どもの意見を言い換えてみる。

別の言葉で表現することにより、話し合いにリズムが生まれ、複数の意見に関連性をもたせることができる。

⑧異なる意見に関連性を見付ける。

対立しているようで、実は別の言い方にすぎないことに気づいていない場合がある。同じ意見の反復を少なくしたり、興味深いつながりに焦点化したりできれば話し合いの集中力を持続できる。

⑨ときにはコメントを加える。

子どもの発言に自分の考えを付け加えても良い。主旨にそったコメントに限り、授業者の見方や考え方の押しつけをしない。

⑩話題の転換をする。

「ちょっと違った角度からこの絵を見てみましょう。自分がこの絵を描くとしたら、どのように描きますか?」どのような答えが出てくるかは、子どもたち一人一人の自由な想像と判断に委ねられている。

⑪次の作品に移りましょう。

話し合いに進展がないと判断したら、これまでの話し合いをまとめて次に移る。



県立美術館のワーク

ショップ

以上が基本的な鑑賞の進め方であるが、留意点を以下に記す。

(2) 授業のポイント

- 「正解」も「間違った答え」もない。

「受容的な態度」が、このアレナス流の基本的な心構えである。受容は、鑑賞者の発言に対する共感的理解を大前提とし、鑑賞者と発見をともに喜び、ともに楽しむ心性に裏付けられている。これらは、次の五つの働きかけになる。①受け入れる、②鑑賞

者の意見から始める、③よさを見 つける、④ほめる、⑤ともに喜び、ともに楽しむ。^{*34}

「はい・いいえ」で終わる発問や一つの正解に導くような発問などは避ける。発問は、考えを創 り出させることを重視し、いわば「開かれた発問」を心がける。

●話し合いへの参加を促す。

発表が苦手な場合は、消極的で受け身になりがちである。そこで、授業者は立ち位置を変えて視 線を送ったり、指名をしたりする。

他人の発言を理解していない子どもや聞き取りに集中していない子どもに目配りをする。そうした様子がみられたら、発言者にもう一度分かりやすく説明を求めたり、他の子どもたちの理解具合 を確かめたりしてみる。

●美術の知識を伝えたい気持ちを抑える。

知識をもち出すと、授業者が答えを知っているかのように錯覚し、主体的な関わりや自由な考え の創出をためらう恐れがある。鑑賞能力の発達段階の研究によると、鑑賞の経験の浅い者は、作品 をじっくり見ようとせず、自分の記憶や経験へ連想が飛躍し、その思考は作品の中に留まることが ないとされる。まず「物語を語らせ」て、その発言意図を授業者が肯定的に認めつつ、より普遍的 な言葉に導いていくことが大切になる。

●親しみやすく物語性のある作品を選ぶ。

最初は話し出しやすいように物語性のある作品やお話しを導き出しやすい作品を準備する。それ からだんだんと不明瞭で、情報量の多いものを見せていく。9歳から12歳ぐらいでは、少し怖い 感じのする作品やミステリアスな作品も好む。これまで西欧近代の作品や特定の作家に集中しすぎ てはいなかったか。様々な文化や時代、異なる民族や様式、いろいろな素材や技法の作品に出会わ せたい。^{*35}

このようにみてくると、アレナス流は「芸術作品を対象として、作品を見る目や作品に関する知識が豊かな専門的な経験を積んだ者だけができる特別な鑑賞の指導」とは、かなり印象を異にする。児童生徒の興味関心が高い教材を選定し、指導者の押しつけや一問一答式の授業に陥らないよう発問を工夫し、意欲や集中の具合に目を配りながら、受容的・共感的に接し…等々、いずれも今日の基本的な授業力として必要な要素ばかりである。アレナス本人も、県立美術館のワークショップ…**事例 13** において、この方法は他教科の指導にも転用可能であることを示唆したところである。

アレナス流の指導により、今日求められている資質や能力の育成に成果が上がっていることが重要な要素であると同時に、図画工作科や美術科を専攻した教師でなくても取り組めるところが、このメソッドの良いところである。

*34 上野行一監修、『まなざしの共有』、淡交社、2001、p.78

*35 同上、及び前掲書『MITE!』